

情報学委員会 国際サイエンスデータ分科会

CODATA 小委員会 (第 24 期・第 3 回)

議事要旨

1. 日時 令和2年2月26日(水) 10:00-12:00

2. 会場 日本学術会議 6階 6-C 会議室

3. 出席者(五十音順, 敬称略):

芦野俊宏, 伊藤聡, 井上 純哉, 岩田修一, 大武美保子, 中西友子, 長島昭, 藤井賢一

事務局: 日本学術会議 加藤雅之

4. 議題等

1) 前回議事録確認

2) 前回委員会以降の CODATA の活動概要報告

以下の議論がなされた。

- ・データのトレーサビリティを厳密に考えると責任が持てなくなるとの議論がある
- ・データの信頼度、たくさん集めておけば検証できるので、トレーサビリティと従来の評価手法による評価だけにこだわってはいけない、量が質に変わる
- ・CODATA には使われるのではなく我が国の学術活動のために使う必要がある
- ・人文科学分野との交流も重要で、CODATA として押す必要があるのではないか
- ・データに基づいた予測ではなく目標設定が重要ではないか
- ・RDA や GO-FAIR は予算的裏付けが不安定である
- ・オープンデータの動きは EU、カナダが中心、米国はオープンと言いながら実際には違うので、これを変えたいと言う思惑がある
- ・国益を見据えてその中で紳士の付き合いをするとよい
- ・WDS IPO が日本にあるのは 2020 年度一杯まで確実だが、その後は未定である
- ・データサイエンスで議論されている、トラストや社会貢献などのキーワードが、AI という文脈で議論されているキーワードと重なる
- ・データが信頼できれば、AI に入力するデータは信頼できる、それでも AI が信頼できるかどうかはデータの方で関知しないという立場
- ・先端技術分野では、やるべきことよりもできることしかやらない、どんどん偏って来る、AI でできることだけやる世界に引きずり込まれてしまう
- ・AI for Social Good, Social Impact というキーワードで活動する動きがある
- ・人文科学では、Public Good、公共という言葉で議論されてきた
- ・Humanity に対する貢献という視点での議論が必要である
- ・データに関わる四つの国際的な活動組織、CODATA、WDS、RDA、GO-FAIR の中で、

CODATA は Standard Reference Data, Fundamental Constants に関する役割を強調すべき

3) COATA Activities and Achievements の確認

以下の議論がなされた。

- ・ CODATA の国際会議では、個別の分野での研究の発表は少なく、データポリシーや国際プロジェクトの報告などが議論されている
- ・ データポリシーについて議論している人は、マネージャーや、データセンターを運営する実務的な人などが多い
- ・ コンテンツについて議論する場もあった方がよいが、CODATA に行つて分野別のデータに関する議論をしても仕方ないという動きになっている
- ・ 各分野でデータの議論の場ができると、そちらに行ってしまう
- ・ 環境について議論する場は他にもできてきたので、ここでは議論されなくなった
- ・ CODATA は議論する種を作り続けてきたという経緯があるが、種が育つと他組織に持つていかれて CODATA の存在感がなくなる課題が常にある
- ・ CODATA は世界の地域や広く多くの学術領域におけるデータ活動を見渡してデータが不足する、バランスを見る、課題を提言するなど、見渡す役割がもともと大きかった
- ・ Fundamental constants は CODATA の役割との基本的な合意が取れているが、これについて議論するセッションはなかなか開かれない
- ・ 基礎定数を用いて基本的な単位を定義するという大目標が、昨年キログラムの定義が変わったことで達成されてしまい、次のことを考える必要が出て来ている
- ・ 国際度量衡委員会でも AI が理解できる単位表現などの議論がなされつつあり、CODATA の TG-DRUM とも目標を共有している
- ・ 規格という観点でポリシーについても議論できるのではないか
- ・ ポリシーについて議論する場に日本が入っていないのはもったいない、データを持っているので規格の策定にもイニシアティブを取れるはず
- ・ 海外はコンセプトだけ決めてフレームワークや規格を作って、データを集めるところは日本がやることがある
- ・ エルゼビアが査読情報をブロックチェーン化して、論文の信頼性を確保するとの動きがある
- ・ 論文を提出する際に、データも提出するため、データが出版社に集まっており、これがビジネスになると気づかれている
- ・ ドイツはエルゼビアとの契約を打ち切ることを国として決めたが、中国が大顧客であるためエルゼビアとしては問題になっていない

4) Japan CODATA National Dues Letter/Invoice 2020 の確認

- ・分担金の請求について金額等確認された

5) 小委員会報告案の確認

議長より、**Beijing Declaration** の和訳に本委員会での議論と宣言作成の経緯などをまとめて報告書として公開したい旨の説明があった

- ・このような報告が、第一線の研究者が知らないのが問題である
- ・広い意味での科学技術データを統括的に扱う組織が必要だという宣言を付け加えたい
- ・今後の日程として8月又は9月に次回の委員会を開催し、10月のCODATA GA 役員候補の推薦と日本学術会議の代表を決めることとしたい旨説明があり、国際的に発言するためには、同じ人が役員を継続することが重要との見解が示された
- ・上記の点を踏まえて芦野が文案を作成し、メール等によって確認を経たのち国際サイエンスデータ分科会での審議に付することが合意された

以上